防災保育実践における成果と課題
―― 過去10年間の保育者・保護者アンケートの分析から ――

Achievements and Challenges in Disaster Prevention ECEC Practices Based on Analysis of Questionnaires from ECEC Teachers and Parents

山　田　伸　之　　丁　子　かおる
YAMADA Nobuyuki　　CHOJI Kaoru
（高知大学理工学部）　（和歌山大学教育学部）

2021年９月21日受理

Abstract

Disaster prevention awareness in Early Childhood Education and Care (ECEC) is an urgent issue to improve. In this context, the authors have been exploring and practicing disaster-prevention childcare for infants and toddlers young children (0-6years) that is experiential, encourages children's spontaneous activities, and allows teachers to work on disaster prevention themselves, sometimes including their parents. In this report, we summarize the results of a questionnaire survey for 10 years of parents and teachers that we have conducted through these disaster prevention childcare practices. Based on the results, we decided to create a roadmap for "qualitative improvement" for future disaster prevention ECEC practices.

キーワード：防災保育、保育園、幼稚園、認定こども園、アンケート調査

１．はじめに

東日本大震災から10年を経て、教育現場での防災教育について、防災意識の向上とともに、実践事例も蓄積され、取り組みの「量的な改善」はそれなりに進んできていると考えられる。特に小中学校などについては、地域や行政とともに積極的な拡充がなされている。反面、保育園や幼稚園などでは、避難訓練を中心にした活動にとどまることも多いのが実態である。幼保での防災を意識した保育の取り組みの充実化は、喫緊の課題でもある。こうした中で、著者らは、乳幼児を主対象にした体験的でかつ子どもたちの自発的な活動を促す仕掛けを組み込み、保育者自らも取り組める防災保育の内容の模索と実践を、時には保護者とも一緒に、東日本大震災前から今日までの約10年間において、PDCAサイクルを意識しながら継続してきた［例えば、山田・丁子[1),2)]、Yamada[3)]］。本報告では、これらの防災保育実践の概要を記すとともに、防災保育を通じた保護者や保育者たちへのアンケートの取りまとめを行った結果を報告する。これによって、今後の「質的な改善」への道筋をつけることができるものと考えられる。

２．これまでの防災保育実践とその内容例

これまでに著者らが行った防災保育の実践取り組みのうち、アンケートを実施した園のリストを表１に示す。園の規模や地域に偏りはあるが、園種や形態など様々なケースで実施してきている。園記号が同じものは同一園で、継続的に実施する検証も含んでいる。防災保育の中の防災教室の内容のアウトラインについて、図１に示す。一連の活動においては、幼児が人形劇を見たり、身を守るための姿勢を歌とダンスを交えて学んだり、揺れや煙・暗やみなどを体験したり、ガラスの破片や倒れてくるものなどを模擬した危険物を回避したりする経験ができる「手作り」のアトラクションを用意し、それらを１つずつ乗り越えていく活動の過程を設定した。この10年間で部分的な改変はしているが、いずれの園でも概ね同じ内容としてきている。写真１～４は、ペープサートによる劇の鑑賞、だんごむしのポーズをとっている様子、ゆらゆら壁の様子、煙トンネルから出てきた子どもたちの様子である。こうした災害時を模擬した手作りアトラクションについては、体験的活動を友達や保育者と一緒に体験することで、恐怖心よりも興味や挑戦心を、そして、楽しさを盛り込むことで、乳幼児に合わせた印象付けとして高い効果をもたらすものと言える。防災教室実施後には、家庭で記入する防災カードを園児全員に配布し、一部では保護者も参加する形を取り、子どもたちの姿を伝えるだけでなく、防災について園から家庭教育に繋ぐ機会にもなっている。なお、これらの保育活動には、前任校の福岡教育大学や和歌山大学教育学部の大学生も協働しており、保育者養成にも活用している。

表１　主な防災保育実践事例

No.	園記号	実施年月	園種	公私	所在地	参加子ども数		アンケート		保護者参加
						0－2歳	3－5歳	保育者	保護者	
1	Hk	2011/1	保	私	福岡県宗像市	数名	60			
2	AR	2011/10	こ	私	佐賀県有田町	80	150	○	○	
3	SY	2012/2	保	私	大阪府吹田市	55＋α	74	○		
4	W	2012/2	幼	公	福岡県北九州市	－	37	○	○	○
5	Kw	2012/9	幼	私	福岡県福岡市	－	141			
6	Kr	2012/9	幼	公	福岡県北九州市	－	20			○
7	Hk	2013/8	保	私	福岡県宗像市	数名	60			
8	Kr	2013/9	幼	公	福岡県北九州市	－	15	○	○	○
9	O	2014/2	幼	公	和歌山県和歌山市	－	104	○	○	○
10	Tc	2014/8	保	私	大阪府茨木市	56＋α	109	○		
11	Tn	2015/8	こ	私	大阪府茨木市	数名	103	○	○	
12	O	2015/10	幼	公	和歌山県和歌山市	－	104	○	○	○
13	J	2017/1	保	私	和歌山県和歌山市	50	91	○		
14	Hm	2017/2	こ	公	和歌山県美浜町	30	121	○	○	
15	YT	2017/2	幼	公	和歌山県御坊市	－	66	○	○	○
16	O	2018/1	幼	公	和歌山県和歌山市	－	100	○	○	○
17	M	2018/2	幼	私	大阪府堺市	－	203	○	○	
18	Kz	2019/2	保	私	和歌山県和歌山市	26	55	○	○	
19	Tc	2020/3	こ	私	大阪府茨木市	84	118	○		
20	Sk	2020/11	幼小	公	和歌山県和歌山市	－	幼小60	○	○	

※No.20は、幼稚園のみを分析対象

A：ペープサートによる防災「劇」
B：「歌とダンス」による身を守る姿勢の練習
C：アトラクションで災害体験
　a「ぐらぐら台」：揺れを体験
　b「ゆらゆら壁」：落下の危険物を避ける体験
　c「じゃりじゃり道」：足元の危険物を避ける体験
　d「もくもくトンネル」：煙の充満する空間を体験
　e「まっくらトンネル」：暗闇を体験

図１　防災保育の主な流れ・内容

写真１：ウサギと猫のペープサート劇を熱心に見入る園児たち。演じるのは和歌山大学生。写真１は、山田・他[4]より抜粋。

写真２：「ぐらぐら台」（簡易手動振動台）の上で「だんごむしのポーズ」をする園児たち。台を揺らすのは、学生や保育者たち。

写真３：「ゆらゆら壁(段ボール製)」で崩れる壁を模擬。園児たちはそれを避けながら歩く。壁を崩すのは、園児たちの実態をよく知る保育者の役割。

写真４：「もくもくトンネル(煙体験)」をくぐる園児。右は、親子で防災保育に参加した親子(乳児と母親)も参加した時の様子。誰もが安心して参加体験できることも、本研究での防災保育の大きな特徴である。

３．防災保育実施後のアンケート結果

防災保育終了後に子どもたちの様子やそれらの教育的効果を把握するために、保育者と保護者へのアンケート調査を実施してきた。アンケート内容を表２、３に示す。保護者向けのものは、幼稚園・こども園に限定されるが、「家庭での子どもとのやり取りについて」や「園との関わりについて」を尋ね、保育者向けのものは、「実施した防災保育･防災教室について」を設問としており、防災保育の質的改善のヒントを得ることを視野に入れている。

図２は、表２の保護者向けのアンケート結果の一部で、はい・いいえの二択の回答である。図２中の「その他」には「分からない」「どちらともいえない」と回答したものが該当する。各問の回答総数(N)を図中に記す。兄弟姉妹で園児がいる家庭が１件となっている場合や未記入があるため総数は統一されていない。このアンケートは無記名で、回答総数は、保護者754件、保育者319件である。図２の問２の結果によると、「これまでの家庭での話し合い経験」については、68％で実施されていることが分かる。子どもが自分から話したケースと保護者が尋ねたケースがあるが、対話ありが７割であった。図３に、問２の設問で「はい/Yes」と回答した割合を園毎に示した。大半は、60～70％であった中で、No.14、15の園では90％を超えており、高い値となった。この両園は和歌山県の南部に位置し、日常での防災への関心が高いことがうかがえる。また年を経るにつれて、徐々に割合が増加するようにも見えるが、近年は70％前後で推移し、横ばいである。また、図２の問３の結果では、71％の比較的高い割合の家庭で子どもから防災保育の話があったことを示しており、防災保育が印象に残り、家庭に運ばれたことを表している。ただし、就労などで保護者参加のない保育園児を中心に残りの３割はなされていないことが示され、課題が残る。家庭で子どもたちとどのような会話がなされたかについての詳細は、別の機会に紹介したい(一部図６)が、方言が織り交ぜられた微笑ましい

表２　保護者へのアンケートの内容

問１	年齢など
問２	もしもの時について、家族で話し合われたことがあるか？
問３	地震防災保育について子どもが(と)話をされましたか？
問４	園での防災保育をもっとやった方が良いか？
問５	防災保育の際、家庭と園で連携して行う機会が必要か？
問６	その他、感想や気づいた点

表３　保育者へのアンケート内容

問１	年齢・クラス
問２	地震防災教室についての感想
問３	印象に残ったものはあるか？ 「ある」と答えた場合、２つ(１つ)選ぶとすれば何か？ 「ある」と答えた場合、その理由は何か？
問４	体験的な防災保育は子どもにとって必要か？
問５	今回の地震防災教室を行ったことでよかった点、改善点
問６	その他、感想や気づいた点

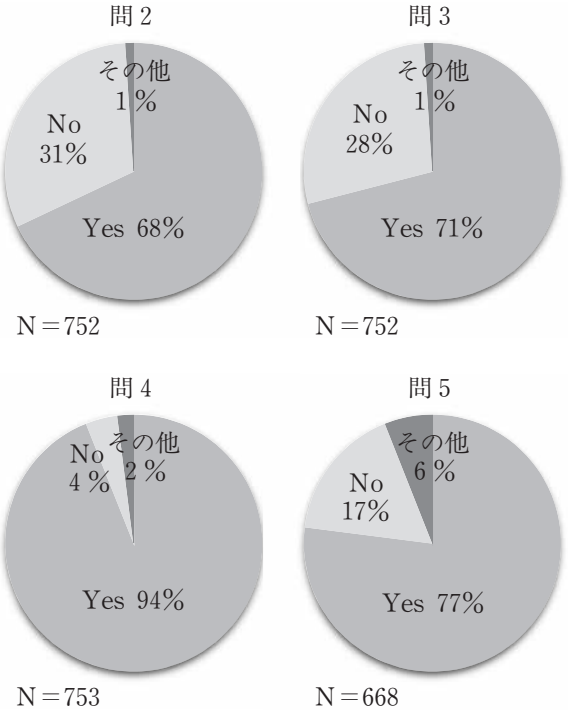


図２　保護者アンケート(表２)の結果の一部

光景が浮かぶ回答が多くみられている。図２の問４の結果では、９割以上の保護者が「防災保育は必要」と答えているが、設問５の園との連携になると77％に下がり、実際の防災活動となると消極的になり園任せの傾向があるようである。

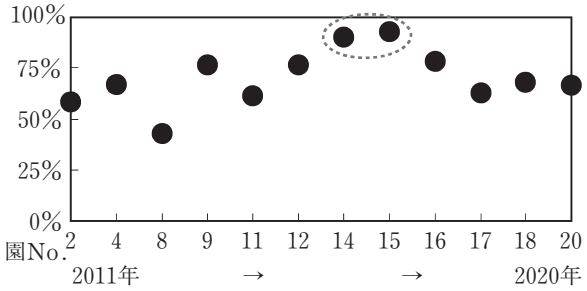
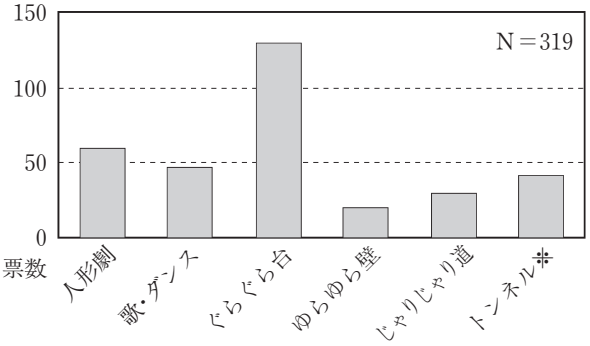


図３　保護者アンケート（表２）の問２の結果における園毎の「はい」の回答割合

図４には、表３の保育者向けアンケートの問３について、図１に示す印象に残ったアトラクションを選んでもらう設問の結果である。No.17の園は１つ、それ以外の園は２つ選んでもらった。それによると、「ぐらぐら台（簡易手動振動台）」への票がもっとも多く、「人形劇」「歌・ダンス」の順に高い評価となった。ぐらぐら台については、「足元の揺れ」というもっとも体験しにくいことを疑似体験し、揺れることの実感を持てた結果と考えられる。また、劇や歌などは、子どもでも分かりやすく親しみやすいアプローチが防災と結び付くものとして、高評価を得たと考えられる。こうしたものを子どもたちが真似ることでその後もしばらくは、遊びの中で継続された例も多く報告されたことから、すべての園で保育者たちが継続し、日常の保育の中で園での防災（安全）教育に活用し、意識を高めることができれば、より効果的な防災保育になるであろう。これら以外にも、感想など自由記述の回答も多数得られており（総数204件）、保護者および保育者から様々な意見、防災に関する質問や園への要望などが寄せられた。これらは、全般的に前向きなコメントが多かった。記載された内容の例として、最近のものを、図５（保護者）と図６（保育者）に記す。各コメントに記載のNo.は、表１の実施園の番号に対応する。



※集計には「もくもくトンネル」と「まっくらトンネル」を分けていない。

図４　保育者アンケート（表３）の問３についての得票数

図５では、子どもたちが園で受けた防災保育の話を持ち帰っての反応や直接参加した保護者の意見などが中心である。①や⑥など家庭での子どもの様子を記すとともに、②や③など要望を述べる内容が多かった。要望については、保護者の参加を求めるものや繰り返しの実施を求めるものなどであり、「防災保育の必要性と反復性」についてはおおむね理解が得られているものと考えられる。保護者の参加については、幼稚園では多いが、こども園等で寄せられたコメントにあるように都合がつかずに参加できなかったというものがあり、就労等で参加がそもそも難しい様子が伺える。こうした園と家庭を繋ぐだけでなく、園での防災保育活動の子どもたちの姿を見ることが、保護者の防災意識向上に繋がればその意義は大きいと言える。また、家庭での防災教育については、話し合うことや地域の防災訓練に参加するといったことが挙げられているが、それで止まっているのが現状であることも判明し、防災に関する家庭教育の在り方、そしてそれをサポートする園の位置付けも今後は重要な課題となるであろう。

【保護者アンケート　自由記述：抜粋】

①年少クラスの娘でもよく分かるよう教えて下さった様で良かったです。家で特意気に話をしていました。とても勉強になったようでした。（No.16）

②子供たちだけではなく保護者も一緒にする方がいいと思います。（No.16）

③くり返し講習を行ってほしいです。（No.16）

④避難訓練は“怖い”イメージが強い子供ですが、恐怖心だけでなく、少しゲーム？のように体験させて頂けたようで、よかったです。（No.17）

⑤防災について、家で子供と話した事はありましたが、地震防災保育でガラスの上を歩いたり、地震の揺れの体験をさせて頂き子供の防災意識が強まり、とてもいい経験になったと思います。ありがとうございました。（No.17）

⑥その日の夜、窓から外を見ているので何を見ているか聞くと「地震が来ていないかみてるんだ」と言っていました。とても心に残ったようです。大切な体験をありがとうございました。（No.17）

⑦毎月防災訓練を行っているので、家でも幼稚園でもいざという時に行動できる力が身についていると感じます。（No.20）

⑧いつ来るか、体験した事のない災害に子供は何をしていいかわからず大人の言う事にだけ反応します。それでも何度もやっているうちに自分でどうしたらいいかを考え、生き残る方法を体に教え込んでほしいです。私はこの10年ずっと動画で地震・津波のものをたくさん見ましたが、防災教育をどれだけやっても失う命があると思います。たくさんするしか生き残る方法もないと思います。（No.20）

図５　保護者からの自由記述コメント

【保育者アンケート　自由記述：抜粋】
①子どもたちにとって、お話を聞くだけではなかなか分からない事でも、実際に少しでも“体験”する事で取り組む姿勢や意欲も違うことに気づき、また、職員もどのように子どもたちを守るか再度考えることが出来、とても良い時間を頂けて良かったと思います。（No.17）
②子どもたちの受け止め方が、年齢によってかなり違うことが分かった点。まっくらトンネルは立って移動できる高さでもよかったと思う。（No.17）
③防災を学ぶ機会は乳幼児さんにとってあまりない機会なので子どもたちにも楽しく分かりやすく学ぶことができ、防災というものが、子どもたちにとって具体的にどうすることなのか、どんな方法があるのかを学ぶことで身近なものとなっていくため、とても良かったと思います。（No.18）
④終わってから、子どもたち同士、こうやって避難しなあかんねんなと、話す姿が見られた。引き続き、防災保育をしていきたいと思う。（No.19）
⑤今回学んだ内容は次年度にも引き継ぎして、体験型の防災保育は年間の行事に取り入れてもいいと思った。（No.19）
⑥子ども達にとって学ぶことだけではなく、保育者も一緒に体験することで、保育者自身も危険にあうこと（もくもくトンネルで子どもが安心できるよう言葉を掛けていると自分自身が煙を大量に吸っていた等）が分かり、今後どのようにしていけば良いか考える機会になり良かった。（No.19）
⑦アトラクションを実体験する時、１つ１つの場の説明があれば良かった。（意味がわからずに通ってしまう子が居た為。）（No.20）

図６　保育者からの自由記述コメント

図６の保育者のコメントでは、防災保育についての感想（①、②など）や通常の避難訓練だけでない防災教育の取り組み方のヒントを得た（⑤、⑥）というものが見られた。また、防災教室の取り組み方についての保育者の視点での指摘（⑦）もあり、今後の改善へのヒントが得られた。さらに、こうした防災保育を通じた子どもたちの育ちの姿についての記載（④）もあり、保育者たちが防災保育の意義を感じられる機会にもなったものと考えられる。

こうした形で、個別の記述の回答を精査することで、これまでに我々が実践してきた防災保育の良い点と課題が明らかになり、今後の防災保育の新しい展開への道筋になると考えられる。防災保育の目的としては、子どもたちの育ちを、防災保育を通じてサポートするだけでなく、その周りの大人たちの防災に関する再教育をしていくことにもある。これらの保護者・保育者のコメントからは、その点についてもある程度の形ができてきたのではないかと考えられる。

４．保護者アンケートの自由記述の分析

こうした自由記述のアンケートについても、10年間の防災保育の継続によって、ある程度まとまった分量（総数213件）になってきた。そこで、樋口[5),6)]を用いて、記述されたアンケートの定量的なテキスト分析を試みた。保護者による回答文について、使用された語句のリストを表４に示す。ここには、抽出された語句総数2,638語のうち、名詞類（名詞・サ変名詞等を合算した上位20語）および形容詞（２回以上使用された語）に分類されるものを挙げた。前者は総計1,020語、後者は98語が抽出された。名詞については「地震」「防災」「訓練」「避難」「災害」といった防災に関連する語句と「子ども」「家」「家族」「親」といった家庭に関連する語句が多く使われ、保護者が気になるワードが数として現れているものと考えられる。また、抽出された形容詞については、防災保育に対するプラスのイメージと捉えられる「良い」「楽しい」「興味深い」などが抽出された。また、災害などへの「怖い」「難しい」といったマイナスイメージも挙げられ、保護者たちの防災保育に対する思いと災害に対する思いが交錯していることが推察される。

これらの抽出された語句のうち、前述した名詞について、共起ネットワーク図を図７に示す。この図は、頻出回数が多い語句ほど大きく示され、また、出現パターンが似通っていて関連性が強い語句は太い線で結ばれ、その関係性のグループに色を付して表している。これによると、頻出回数の多い「子供」「地震」「防災」「体験」といった語句は同一グループになるとともに、結びつきも強いものとなっていた。つまり、これらの語句は皆が同じように、また似たことを意図する文章

表４　保護者アンケート（自由記述）にみられる頻出語句（名詞と形容詞）

名詞	回数	名詞	回数
子　供*	56	災　害	14
地　震	55	場　所	14
防　災	49	身	14
体　験	45	経　験	12
子ども*	25	勉　強	11
機　会	24	保　育	11
避　難	23	家　族	11
話	23	園	10
訓　練	22	親	10
家	18		
参　加	16	名詞：1020語	

形容詞	回数
良　い	42
楽しい	12
怖　い	6
小さい	5
高　い	3
深　い	3
強　い	2
興味深い	2
近　い	2
少ない	2
多　い	2
大きい	2
難しい	2
無　い	2
形容詞：98語	

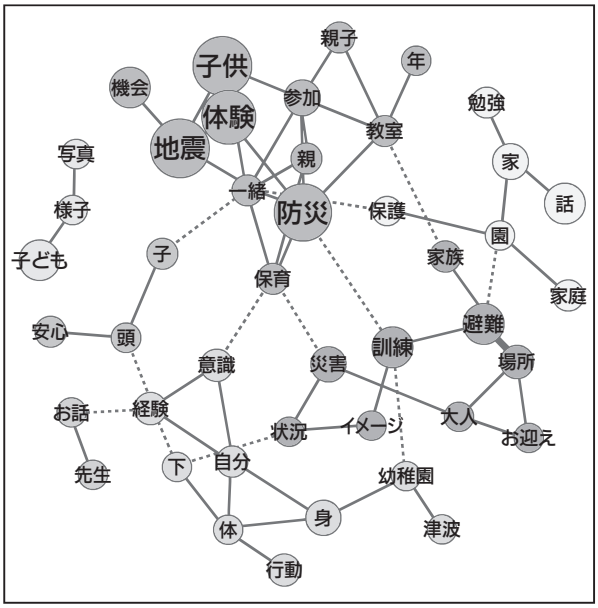


図７　抽出名詞による共起ネットワーク

として使用していたことを意味し、回答者がどこに意識を向けていたかを窺い知ることができるものといえる。例えば、図５中の⑤では、「防災について、家で子供と話した事はありましたが、地震 防災 保育でガラスの上を歩いたり、地震の揺れの体験をさせて頂き子供の防災意識が強まり・・・」となる。アンダーラインを付した語は、図７中の同一グループ内で結びつきの強い頻出語彙であることが分かる。こうした保護者たちのキーワードになる「言葉」が近い距離で連結されて繋がりあっている点から、体験的な学びを通して低年齢からの地震防災について理解を深めるという筆者らのねらいが、保護者たちの心象において成果として感じられていることが窺える。また、その周辺とのつながりは、家庭に子どもから運ばれた地震防災保育の経験が、大人たちの子どもと避難する際の気づきへの広がりと考えられる。こうした点から、防災保育の意義は小さくはないと考えられる。

なお、ここでは、名詞の「子供」と「子ども」は、漢字と平仮名の違いでほぼ同義語であるが、独立させたものとして扱った。図７の共起ネットワークによると、「子供」は防災教室での内容や防災に関する語句との連環が強くあると判断された一方、「子ども」については、そのようにはなっていない。ただし、合わせると81回の頻出であり、最も多いことになる。子どもを中心に置くことで、災害時の対策への視野が広がっていきやすいことを示していると思われる。更なる検証は必要だが、こうした自由記述アンケートに使用される言葉から、回答者の防災に関する心理的な意識についても探ることができる可能性があり、今後検討したい。

５．まとめ

本稿では、防災保育実施後の保護者や保育者を対象にしたアンケートについて、全体の集計結果と傾向について報告を行った。全般的には、防災保育について肯定的な意見が多く、園も家庭も防災保育についての理解も進んでいるものと考えられた。また、保育者などの反応からも、防災への意識の高まりが見受けられた。保育者たちの積極的な姿勢がより安全に配慮した保育の実行に繋がると考えられ、さらなる自発的な活動が望まれる。なお、両者ともに、意識向上については、上げ止まりの傾向が見られるため、新たなテコ入れは必要である。アンケート記述の分析をさらに深めることで、こうした問題点の糸口も見つけられると予想される。今後は、記録として得られている防災保育の映像や保育者との反省会等の記録を精査するとともに、その客観的な効果検証についての可能性も模索したい。また、防災に対しての意識が高くない家庭に対してのアプローチの仕方などを関係園と連携して検討することも必要である。

謝辞

ここで示した実践やアンケートは、各園の関係者・保護者のみなさま、福岡教育大学や和歌山大学教育学部の学生さんたちのご協力により実施されました。また、この研究の一部は、JSPS科研費（19K02615）などの補助により実施されました。関係者各位に記して感謝いたします。なお、本稿の一部は、山田・丁子[7]で発表されたものです。

引用文献

１）山田伸之・丁子かおる「乳幼児からの体験型地震防災保育プログラムの開発」，『日本保育学会第65回大会』，2012，B2，090.
２）山田伸之・丁子かおる「和歌山市立岡山幼稚園での地震防災保育についての一考察」，『和歌山大学防災研究教育センター紀要』，2016，第２号，44-49頁.
３）Yamada，N.，“Report of Earthquake Disaster Prevention Childcare in Nursery School and Kindergarten”，*17th World Conference on Earthquake Engineering*，2021，11a-0001.
４）山田伸之・丁子かおる・馬場訓子・高橋敏之「園の特色を活かした地震防災保育の事例研究－育ち合いから学びをつなぐ－」，『和歌山大学教育学部紀要』，2019，第70集，33-40頁.
５）樋口耕一「KH coder」，https：//khcoder.net，最終閲覧日：2021年10月26日.
６）樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して（第２版）』，ナカニシヤ出版，2020年.
７）山田伸之・丁子かおる「過去10年間の防災保育実践における成果と課題－保育者・保護者アンケートの分析から－」，『日本保育学会第74回大会』，2021，P-B-3-6.